第2章 銃後

勤労動員①

バターと練乳のおみやげが親孝行に

細野邦夫さんのお話から

私が小学校六年生のときに太平洋戦争が始まりました。小学校は名前が国民学校に変わり、卒業証書ではなくて修了証書をもらいました。その後、私は小樽市の中学校に入りました。

だんだん負け戦になってくると、日本は「国民皆兵」となり、兵隊になって早く戦争に行ってもらうために、中学校や大学などは期間を短くして卒業させるようになりました。また、男の人は兵隊に行くため、農家や工場で働く人たちが少なくなり、そこで、中学生は立派な大人と同じ体をしているので、その人たちに代わって働くことになりました。これが勤労奉仕、あるいは勤労動員と言われるもので、私もその一員となったのです。

昭和十八年（一九四三年）の六月と九月には、蘭越町の駅から四キロ以上も山奥の中で植林作業というものをやりました。作業は、まず、山に火をつけてササを燃やします。そして、手を伸ばしたぐらいの大きなクマザサが生えているところに入り、大きなかまでササを刈りながら、そこに松の木を植えていったのです。

そこでは、クマが時々出ました。四十人か四十五人がやっと泊まれる粗末な建物にトイレが一か所、おふろはドラム缶の五右衛門風呂に一日五、六人が交代で入り、食事は、朝昼晩とおにぎりで、私の親指ぐらいのしょっぱいサケが一切れとたくあんが二切れのおかずがつくだけでした。また、ランプ生活なので、仕事が終わった後には本が読めず勉強はほとんどできませんでした。

毎日の作業は、アメリカの飛行機がいつ爆弾を落としに来るか分かりませんから、穴の中に

○国民学校　昭和十六年（一九四一年）の国民学校令というきまりにより、これまでの小学校を改めて成立した教育機関。

○国民皆兵　すべての国民が兵役の義務をもつこと。

○勤労奉仕　勤労動員のこと。おもに軍需産業の労働不足が深刻化したために強制的に労働力として動員した。対象は学卒者、農家をはじめ、未婚の女性や学生、生徒、なかば強引に連れてこられた朝鮮人、中国人まで拡大した。

○ランプ　石油などを燃料とし、これに芯を挿入して火を点じ、照明として使う器具。

○防空壕　航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

○練乳　牛乳を煮詰めて濃縮し、保存性をもたせたもの。

逃げられるように、私たちがしゃがんですっぽり入る防空壕という穴をグラウンドの端にみんなで掘りました。昭和十八年のころは、そのような穴を二十も三十も毎日掘っていました。

昭和十九年には、幌延町の工場に行きました。二戸つなぎの住宅の片方に十五人が入って生活をし、牛乳から大変接着力の強い「カゼインのり」というものを作りました。どうしてそんなのりが必要になったかというと、日本の飛行場では飛行機が戦場に飛んでいってだんだんなくなったので、アメリカに「すぐに日本をやっつけられるな。」と思われないように木で飛行機を造って本物に見せかけたのです。また、飛行機の材料であるアルミニウムが不足したので木で飛行機を造っていました。その飛行機を造るためにのりを使ったからです。

その工場ではいい思いもしました。当時、砂糖は普通の家庭には全くありませんでしたが、この工場では練乳を作って兵隊のところに送らなければなりませんでしたので、一つの大きな部屋に砂糖がびっしりあり、二週間に一度、そのお砂糖を使ったぜんざいを食べることができました。また、お米の中にカボチャを入れたカボチャご飯やバターも食べられましたから、味噌汁の中にバターを入れたり、カボチャご飯の上にバターをかけたりするのが結構おいしかったのです。戦争中でいい思いをしたなと思うのはそのときだけでした。さらに、毎月、そこに勤



イメージ図

畑作業をする勤労動員

めている人たちにバターや練乳が配られ、帰るときにはそれをお土産にくれたので、それを持って家に帰ると親が大変喜びました。それが唯一の親孝行でした。

昭和二十年には、芦別に行きました。農家の人が兵隊にとられているものですから、そこでは、農家一軒に中学生が一人ずつ入り、馬を相手に水田と畑を作ったのです。当時は魚かすを肥料としていましたが、それが不足して馬糞やトイレから人間の糞を持ってきて水田の中に入れて、私たちが馬と一緒にかき回してならしたのです。そのような大変な経験もしました。また、戦争に行っている馬の飼料であるえん麦を作るため、畑の向こうの道路まで二往復ぐらいしたら昼になってしまうくらいの大きな畑の草取りをしました。それも全部馬を使ってやりました。中学生の男一人でやるのですから本当に大変な作業でしたが、そのようにして一生懸命に農業をしました。

その当時、ラジオでは「どこどこへ攻めていったら勝ちました、どこどこの島を占領しました。」という放送しかなかったので、私たちは今に勝つだろう、今に勝つだろうと信用しながら聞いておりました。ところが、八月十五日に降伏し、戦争が終わったのです。

あと三か月戦争が続いていたら私も兵隊になっていたのですが、思っていたよりも早く戦争が終わったので、そのまま今日まで命を長らえているわけです。

○えん麦　イネ科の一年生または二年生作物。おかゆ状に煮て、温かい牛乳と砂糖をかけて食べるオートミールとして食用とするが、主に馬などの飼料として重要。



イメージ図

粗末な食事

戦争が終わった後、日本は食べ物もない、住む家もない、そして満足に着る物もない、そういう状態でした。家族が何か食べられる物がないかと、みんな探し歩きました。それまで日本の女の人は和服を着ていることが多かったのですが、その大事な和服をわざわざ農家に持っていって、「大根でも何でもいいです。この着物と交換してください。」と言って、物々交換をしました。それを持ってきて家族に細々と分け与えたのです。それぐらい、戦争が終わってしばらくは大変だったのです。ところが、朝鮮戦争が起き、日本の景気が良くなると、失業者もなくなり、今日のような日本の第一歩を築くことができたのです。だからといって、戦争はいいなんて思ってはいけません。ただ、そういう歴史があるということだけ頭の隅に残しておいていただければありがたいと思います。

戦争では、兵隊で亡くなった方、爆撃で亡くなった方、あるいは途中で傷ついてそのまま亡くなった方などを含めると、日本人だけでも三百十万人います。その犠牲者の上に、今日の日本があるのです。

これからは、戦争は絶対にしてはいけません。今以上にどこの国の人たちも仲よく手を結び、みんなが輝いた目でどんな場所ででも話し合いや握手ができ、明るい地球、素晴らしい日本になるように力を注いでください。顔の色、顔の形、生まれた国、そして生まれた家など世界の人間はみんな違います。でも人間ということは同じです。どうぞ、お友達を大事にしながら勉強を積み重ねて、平和のありがたさをじっくりと思い起こしていただければありがたいと思っています。

○物々交換　物や貨幣などの媒介物に頼らず、直接他の物と交換すること。

DATA

平成21年度手稲区平和事業
聴き取り
・平成21年9月7日
・新発寒小学校



細野邦夫(ほその・くにお)さん
・昭和4年(1929年)生まれ
・札幌市手稲区在住